2023 年度 第 2 回　博士キャリアカフェ

アカデミアで働く　～教育，研究，そして社会～

【開催日】2023 年 10 月 24 日（火）12：15～13：15 （オンライン開催）
【講師】 野村　実　先生（大谷大学社会学部　講師）　博士：社会学

今回は，2018 年 3 月に立命館大学大学院社会学研究科応用社会学専攻博士後期課程（在学中に学振 DC2 に採用）を修了後，大谷大学文学部助教，立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員を経て，2022 年 4 月から大谷大学社会学部コミュニティデザイン学科で講師を務めていらっしゃる野村実先生にご講演を頂きました。

1.　大学～博士前期課程

大学院に進学した理由からお話したいと思いますが，私は，立命館大学産業社会学部人間福祉専攻に所属し，地域福祉のゼミで学んでいました。ゼミのテーマは，地域の移動をどう保証するかとか買い物弱者の問題をどう捉えるかということでした。このように地域や社会で起きている問題への興味が出発点になり，これらをどのように解決・改善していくかということに興味を持つようになりました。地域での移動・交通の問題は深刻だと考えていましたが，ゼミの先生から，これは将来的にも深刻になるから，しっかりと研究した方が良いというアドバイスを頂き，自身の研究テーマになりました。参考までに大学時代のお話をしますと，当時，兄が同志社大学に在学しておりまして，その就職活動を手伝ったというのが，一つの原体験になっています。入学した当時は，まだ，スマートフォンは普及していなかったため，パソコンでエントリーをしているうちに，就職とは何かということを考えるようになりました。それから，それまでは金髪だった友人が，2 回生くらいになると，急に黒髪にしてスーツを着て企業説明会やインターンシップへ行くようになり，「何かがおかしいのではないか」と思いました。自分が，そういった場に行くことの想像がつきませんでしたし，周囲と同じことをしなくてはならないという状況に，少し違和感を覚えました。大学院へ進学したきっかけですが，2 回生の終わりに，アメリカのボストンへ 1 カ月あまりの短期留学に行きました。その際に，自分の親戚が留学先の大学で働いていたのですが，そこで，そのような（アカデミアで働くという）選択肢があることを知りました。もちろん，アメリカで大学教員になることは，難しいことは分かっていたのですが，せめて，日本でそういったことができる可能性があるならば，やってみたいという意識を持ちました。この後，3 回生で配属されたゼミで恩師と出会い，研究者，特に大学教員を目指そうという思いが強くなりました。私の指導教員は，「誰かがやらなければ社会問題は解決しない」という姿勢で調査や研究に取り組んでおられました。現在，私が研究している交通やモビリティとは全く異なる，障害児者に関する研究がテーマでしたが，その思いや姿勢に，3 回生の自分は，すごく憧れを抱きました。その姿を見て，大学の教員を目指そうと強く思うようになりました。

2.　博士前期課程～博士後期課程

学部時代の卒業論文は，「高齢者の移動保障とデマンド交通に関する研究」をテーマに執筆し，博士前期課程に進む際には，大学院入試の説明会に何度か足を運び，学部時代の恩師の下で「研究コース（博士前期・後期課程一環）」を選択しました。あまり躊躇はしなかったと思いますが，どうせ修士課程に行くなら，博士課程まで行きたいと考えていました。卒業論文は，単一の事例研究でしたが，修士論文では，比較事例研究をしようということで，デマンド型の交通に取り組む複数の事例を取り上げました。ただ，博士前期課程では，何度も挫折を経験しました。M1 の時には，学内プログラムでの国際学会発表や国内での学会発表を重ね，比較的，順調なイメージでした。そして，修士論文の執筆に向けた調査も無事に終え，博士後期課程への進学に向けた準備を進めていたのですが，M2 の 5 月に，学振（DC1）の不採択通知を受け取りました。今になって考えると，DC1 の採択率は，非常に低いことは分かるのですが，申請書を書いていた当時の自分は，研究のテンションも高い時期だったので，すごいショックでした。これが 1 番目の挫折でした。その後，M2 の 12 月に学会奨励賞と学内のコンテストの賞

を受賞し，成果を得ることもできました。何よりも修士論文の一部と博士後期課程に向けた展望について，評価をして頂いたということが，自身のモチベーションの向上にも繋がりました。学振はダメだったけれども，また，頑張ろうと思うきっかけになりました。さらに，研究計画を立てつつ，目の前の研究を進めていくというマルチタスクの練習にもなったのではないかと思います。もちろん，目の前の研究を進めなくてはいけないのですが，その先に，どのような研究をしていくのかという計画であったり，マイルストーンを設定したりという練習ができました。

3. 博士後期課程～ポスドク

次に，博士後期課程からポスドクの話になりますが，博士前期課程では，社会福祉協議会という，これまで一般的ではなかった公共交通アクターに着目して，なぜ，地域福祉の視点から移動を保障する取り組みがなされているのかという調査を行いました。これに対して後期課程では，自治体や交通事業者，住民組織という他のアクターの役割及びその変化にも目を向けて展開しました。前期課程では，比較的新しいアクターに注目して，後期課程では，これまで取り組んできたものの役割が少し変わったりとか，住民組織がボランティアで担っていたりとか，このような変化があるということで，多様なアクターの地域交通への取り組みを研究しました。そして，2 回目の挫折になりますが，D1 の 5 月頃に大学院の先輩から，「専門学校の非常勤講師をしてもらえないか」というお話を頂きました。自分としては，教育経験を積むことができるせっかくの機会ということで引き受けたのですが，これが，結構，大変でした。資格を取るための授業だったのですが，1 年目の授業の準備は，かなりの時間を要することになり，自分にとっては，かなりの負担になりました。その結果，授業用の資料を作っていたら，大学院のゼミの資料の準備が思うように進まないということが起きました。後期課程進学後は，結構，張り切っていたのですが，思わぬところで引っかかってしまいました。他の先生方に聞いてみたところ，同様の経験をされたようですが，自分としては，ここで，かなり躓いたという意識を持っています。かつ，この専門学校の学生の半分くらいは社会人だったので，当時，24 歳くらいの自分が 50 歳から 60 歳くらいの方々に「社会の理解」という科目の授業を行うことは，結構しんどかったです。

次に，後期課程における幾つかの転機についてお話します。事前に頂戴した質問にも「ターニングポイントは，いつでしたか」というものがありましたが，正に D1 くらいだったと思います。研究が思うように進まずに落ち込んでいた時期に，学振 DC2 の採用内定通知があったことが挙げられます。少しタイムラグがあると言いますか，D1 の 5 月くらいに頑張ったことの成果が，10 月くらいになって現れたという感じです。当時の自分は，かなり落ち込んでいたのですが，学振の内定を頂いたことで，もう一度頑張ろうという気持ちになりました。そこで，D1 が終わる間際に，博士論文の中心となる複数の事例地域及び取り組みに関わる人と出会うという，結構，大きな経験を得ました。それから，学会のパネリストのような依頼を少しずつ頂けるようになりました。これも，1 つのターニングポイントだったのではないかと，今になって考えると思います。学振に採択されたということもありますが，そこから，何としてでも D2 と D3 で頑張って，3 年目で博士論文を提出しようとなり，フィールドワークを基に，国内外の学会で継続的にアウトプットを出すことができました。そして，D2 の中盤で，博士論文提出の要件である 3 本目の査読付き論文の採択が決まったことも，ターニングポイントの 1 つになるかもしれません。つまり，心理的に安心できると言いますか，あと 1 本が足りずに要件を満たせない先輩方を見てきたので，早めに何とかしたいという思いがありました。そういったところで，D2 の中盤で最低限の要件を揃えることができたということは，良かったと思います。その後は，D3 の 9 月に予備論文を提出するために，博士論文の構成を考える作業に着手しました。この際に，博士論文や博士論文を基にした単著を自分の専門分野以外も含めて沢山読んだのですが，これも良い経験となりました。一般的な書籍と違って，博士論文を基にした単著というのは，クセやパターンがあることがわかり，これを参考に自分も書けばよいのかなと思うようになりました。3 年目で博士号が取れる見込みができたことから，D3 になってからは，大学教員の職に就くための様々なポストに応募し続けました。しかし，不採用の連続ということで，この辺りからは，n 回目の挫折になりますが，理由としては，博士号が未取得の段階ということが考えられます。大学教員の公募の場合，博士号取得済みという前提条件が求められることが，結構，あります。また，専門の科目は何かという問題についても，後々，付きまとうことになります。こうやって就職活動を続けることは大変だったのですが，たまたま，大学院の同期で，既に他の大学の教員職に就いている方から，大谷大学の任期制助教のポストをご紹介頂き，応募したところ内定を頂戴しました。

無事に博士論文を提出し，博士号を取得した上で，任期付きではありますが，4 月から就職することができました。

4. ポスドク～現職

次に，ポスドクから現職というところですが，就いた仕事は任期が 3 年で，更新なしという条件でした。1 年目から業績を積んで 2 年目からは就職活動をと考えていたのですが，博士論文を単著にする作業に，かなりの時間を取られてしまい，また，助教になって 1 年目のために慣れないことも多く，思うように進みませんでした。そうこうしている間に 1 年目が終了したのですが，所属していた大学院から出版助成を得たこともあり，2019 年 3 月に単著を出版することができました。この単著の出版が 3 年間の中では，大きな出来事の 1 つではないかと思います。ただ，また，就活がうまくいかないということが出てきました。助教時代の 2 年目から 3 年目に，おそらく 20 以上の大学にチャレンジしたのですが，いずれも不採用となりました。落ち込みたいのですが，助教という仕事の都合上，講義や演習で学生が目の前にいるので，落ち込めないという状況がありました。大学院生の時には，個人研究室で落ち込むということもあったのですが，それもできないため，結構，辛かったですし，学生の前で，そのような姿を見せることができないという部分もありました。自分の中でも難しい時期だったと思います。最終的には，母校である立命館大学の専門研究員（有給の任期付きポスト）に応募し，恩師の研究室に拾ってもらうことになりました。結果的には，1 年で終わることになるのですが，専門研究員は，専門業務型裁量労働制ということで，私の場合は実質的に，かなり自由に研究ができる環境にありました。学振の PD に近いイメージではないかと思います。週に 2 回の非常勤講師を担当していたのですが，それ以外は，研究に専念できるという，本当に贅沢な時間となりました。後にも先にも，こんなに贅沢な時間はないと思われる状況だったので，色々な本も読みましたし，自分の弱かった部分の理論的な補強に役立てました。また，これまでの研究とこれからの研究を見つめ直す，良い機会になりました。1 年目の最初には，幾つかの公募にもチャレンジしたのですが，いずれも不採用となりました。しかし，夏頃に現在のポストの公募が出て，応募し，採用となりました。

現在の大学での仕事としては，コミュニティデザイン学科というところに所属し，地域課題の解決に向けた政策提言や地方部でのフィールドワークを行う「地域交通・買い物アクセスプロジェクト」を担当しています。もちろん，これ以外にも講義や演習もあります。また，研究や教育以外の仕事も多く，各種委員会や地域連携活動にも関わっています。採用以前の段階で，こういう仕事があることについては確認もあったのですが，思っていた以上に多いという印象を受けています。次に，地域や社会での仕事について捕捉しますと，冒頭でお話した地域公共交通会議の委員やアドバイザーのように，現在のポストに就く前から関わっていたものが半分くらい，残りの半分は現在の職に就いてからということになります。現在のポストからは，しばらく動かないだろうという算段の下で，色々な仕事が周りの先生から振って頂くこともあります。任期制ポストの場合には，他の大学に行くことや就職活動もあることから，あまりそういうことはしないということが，暗黙の了解としてあるようなのですが，任期の定めのないポストに就くと，良くも悪くも色々な仕事が回って来ることになります。ということで，現在は，教育，研究，社会の仕事を同時並行で行っているということになります。

5. 簡単なまとめ

最後に，簡単にまとめてみますと，まず，大学で働くということについては，それなりに安定した生活が見込めるというところが，大事ではないかと思います。生活と研究の基盤があるという安心感がありますし，ポスドク時代のような就活への不安感はありません。当然のことなのですが，自分にとっては，本当に有難いことですし，だからこそ，研究へのクリエイティブな発想も浮かんでくる気がしています。もう 1 つは，研究環境の部分で，研究費の他にも個人研究室を持てることが，利点として挙げられるかなと思います。ただし，こうした研究環境は，国公立や私立，役職，職階によって異なっており，大学によって，それぞれかと思います。大谷大学の場合には，任期制助教であってもそれなりに研究費を頂けたので，自分も色々な調査研究をさせてもらいました。このように研究環境がしっかりとあるということは，大学で働く 1 つのメリットではないかと考えています。また，大学において研究以外のお仕事も多いということは，これまでも述べてきましたが，講義や演習に加え，特に私学の場合にはオープンキャンパスなどの入試関連の業務も求められることがあります。こういったことは想像したことはないかもしれませんが，意外と多いという印象です。もちろん，大学によるかもしれませんが，本

学は，比較的小さな大学のため，学生と教職員が一緒になって，頑張っているという状況です。学科広報チームの運営についても，教員側のスタッフの一員として，他の先生方と一緒に加わっています。自分の指導教員が仰っていた言葉に，「学生の入口（入学）と出口（卒業）を大事にせよ」というのがあるのですが，これは，本当にその通りだと思います。やはり，入学と卒業というものをきちっと大事にしなくてはいけないということで，入学してもらうためのオープンキャンパスであるとか，卒業に向けた卒論の指導であるとかを考えた際に，先ほどの恩師の言葉は今でも自分の大事なモットーとなっています。また，大学の外では，学会や社会活動の仕事が回ってきやすいというのもあるかと思います。例えば，学会の会場の手配や調整などの細々とした仕事もあって，ちょっとした事務能力が試されることもあります。また，社会活動についても，自分の守備範囲以外のところから降ってくる可能性もあるので，その際に，どのような対応ができるかということも問われるかなと思います。例えば，自分は交通が専門ですが，それ以外の「まちづくり」や「まちづくりビジョン」をどう立てるかということも，他の先生から振られたりしました。そういう時には，これが自分のスキルアップに役立つかどうかを考えることも大事かなと思います。

最後になりますが，アカデミアで働くということについては，博士に進むことイコール大学教員を目指すということではないと思います。企業や公的研究機関という選択肢もあれば，それを視野に入れて良いかもしれません。私の場合には，数は少ないですが，交通関係のコンサルタントやシンクタンクも考えていました。しかしながら，自分の研究分野は社会学のため，経済学や交通工学を必要とする分野では勝負ができないということで，あきらめた経緯があります。ただ，なぜ大学で働くのかという問いに対するポジティブな理由を申し上げておくと，自分の場合には，若年世代の教育に携わりたいと思っていたことが，1 つとして挙げられます。実際に，働いてみて分かったことですが，4 年間の教育に携わることができるというのは，学生の伸びを見ることができます。入った当初は，それほどやる気が感じられなかった学生が，すごく伸びて卒業していくということもあります。そこに携わることができるというのは，大変嬉しく思っています。あとは，教育や社会での活動と自分の研究を絡めていくことに面白さを見出すことができるかということも，大学では重要ではないかと感じています。ご清聴ありがとうございました。

※ ご講演の後，参加した学生との間で質疑応答も行われましたが，内容については，省略します。

【文責：高等研究教育院　加治木紳哉】

オンライン開催

事前申し込みが必要です

2023年度 第2回「博士キャリアカフェ」10月24日(火)12:15～

アカデミアで働く
～教育、研究、そして社会～

本学では，キャリアパス支援の一環として，アカデミア，企業，官公庁等を問わず様々な分野の博士学位取得者の方から，ご自身の経験や現在の状況について伺う「博士キャリアカフェ」を定期的に開催しています。講師の先生と，ざっくばらんに情報交換ができる貴重な機会となりますので，奮ってご参加ください。
なお，参加をご希望の方は，事前にお申し込み下さい。

【講師】

野村 実（のむら みのる）先生　博士（社会学）

大谷大学社会学部 講師

【プロフィール】
2018 年 3 月 立命館大学大学院社会学研究科応用社会学専攻博士後期課程修了(学振 DC2)。大谷大学文学部助教，立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員を経て，2022 年 4 月より現職。関西各地の地域公共交通会議委員を歴任。

【日時】
2023年10月24日(火)12:15～13:15(ご講演30分，懇談30分)
Zoomによるオンライン開催

【対象】
本学の学生及び教職員

【申し込み方法】
- 本ガイダンスはZoomによるオンライン開催となりますので，事前申し込み制とさせて頂いております。
- 10月20日(金)までに，右のリンクもしくはQRコードからお申し込み下さい。参加用のURLをお送りいたします。

https://forms.office.com/r/PC9M7ywx3b

本件に関するお問合せ先：研究開発推進機構研究企画課
TEL:0774-65-8257
Mail: ji-knkak@mail.doshisha.ac.jp